深福インタビュー

第三回・東京都現代美術館チーフキュレーター　長谷川祐子さん

なかはソフトでウェルカムな美術館

東京都現代美術館チーフキュレーター
長谷川祐子さん

深川の大きな顔である東京都現代美術館（以下：都現美）。二〇〇六年から都現美の企画をとりまとめているのがチーフキュレーターの長谷川祐子さん。世界的にも著名なキュレーターである長谷川さんに都現美や深川についてうかがいました。

―キュレーターとはどんなお仕事ですか。

美術史の専門家と、展覧会を作るプロデューサーと、それを伝えるエデュケーターの三つが合体した仕事です。美術の歴史的な知識や世界のアートをリサーチし、お金を集め、作品をつくってもらい、みなさんに分かりやく伝えることの混合業ですね。

―イスタンブールビエンナーレやブラジルの美術館などでキュレーターをするなど世界の最先端の場で活躍してこられました。

自分では最先端でも何でもないと思っています。様々なものを眺めて、いま起こっていることはこういうことかなと思って、ぽんと出しているだけです。二〇〇七年に都現美で開いた「space for your future」展では「アートとデザインの遺伝子を組み替える」ということを考えました。建築家やファッションの人がアート作品を作ったり、アーティストがデザインしたりと、ソフトに越境してみたらいいのではないかと提案しました。

―「越境」がキーワードですね。

昨年に個展を行った池田亮司さんは元々ミュージシャンですが、三年前からお話しを続けて、「動く抽象画」として見せたら素敵ではないかと考えました。アートと音楽がジョイントする企画になったと思います。

―モダンアートは難しいとも言われます。

私は押し付けが何より嫌いなので、お客さまが理解できなければ、私が悪い。モダンアートは、考えたり、感じたりすることの入り口になるものだと思います。望遠鏡や眼鏡のように、それをかけると世界がピンクやイエローに見えてハッピーになったりする。あるいは世界の裂け目に入っていく呪文だったりします。モダンアートを観ることで、昨日と違う自分になる。だから、いまの若い人たちにとってのリアリティーとは何かをとらえ、それを生産しているアーティストたちを大事にしたい。

―深川という場所をどう思いますか。

おいしいお寿司屋さんとお蕎麦屋さん鰻屋さんと深川丼があって、エクセレントです！なかでも魚屋さんの海彦とか庄之助さんは素晴らしいですね。お店の礼儀正しさや暖かさが残っている場所だと思います。六本木なんかより私は好きです。

―今後の企画のスタンスを教えてください。

アートとしてのクオリティは維持しながら、できるだけ美術館に入りやすくするという「寸止め」が私の極意です。都現美は外観が少し大きくて怖いですが、なかはソフトでマイルドでウェルカムです。深川に住む方たちには、もっと都現美に来てほしい。ご希望があればトークでもツアーでも何でもやりますので。

長谷川 祐子（はせがわ ゆうこ）
東京都現代美術館チーフキュレーター。
最新刊に『女の子のための現代アート入門』（淡交社）